Hiroshima City University
Language Center
広島市立大学語学センター
Newsletter No.42 (2012.1.12)

Michael Gorman 先生、着任メッセージ

今年度４月、アメリカ人の Michael Gorman 先生が着任されました。先生の専門分野はアメリカ文学で、現在は「英米文学特講」「アメリカ文化論」「英文作法」を担当されています。Gorman 先生は五大湖畔、ウィスコンシン州出身。先生の気配りの細やかさ優しさは、その故郷の自然の中で育まれたようです。素敵な故郷 Bayfield から受けた影響について、そして、みなさんへのメッセージを書いていただきました。

目次：

Michael Gorman 先生着任メッセージ
国際学部 Michael Gorman 先生・・・・・・・・・1
ミニコラム 国際学部 湯浅正恵先生・・・・・・2
シニョレルリの地獄責め・・・・・・・・・・・・・3
語学センターと入試広報
教務学生室入試グループ 佐々木宏明さん・・4
視察報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

Bayfield, the Starting Point

国際学部准教授 Michael Gorman

A Small Town Boy

According to my American friends, I am from "the sticks." I grew up in Bayfield, Wisconsin, USA, on the south shore of Lake Superior, the largest of the Great Lakes. Bayfield is small town, a village really, of fewer than 700 people. To better illustrate just how small that is, here are a few facts:

•My kindergarten, elementary school, junior high school, and high school were all in the same building.
•Despite being the largest county in area, Bayfield County has the smallest population of any county in Wisconsin.
•Even now, to watch a movie or to eat at a McDonald's or even to see a traffic light, people from Bayfield County have to drive to one of the neighboring counties!

In place of traffic lights, fast food restaurants, and movie theaters, Bayfield has water and woods. And the best times of my childhood were spent at the lake or in the woods with family and friends. In the summer, we picnicked and camped along the lakeshore and fished, boated, sailed, and swam in the frigid waters of the lake. In the winter, we cross-country and downhill skied, snowmobiled, skated, and ice fished.

From the Small Town to the World

Many people regard being from a small town as an obstacle to education and cultural experiences. It's true that small towns offer fewer educational choices and fewer cultural institutions like art museums or concert halls. At the same time, I think growing up in a rural part of the United States has had a lasting effect on my scholarship,

◆英文作法の授業風景

particularly my interest in rural American civilization.

I learned to appreciate multiculturalism, the environment, and global issues while living in Bayfield. Although not terribly racially diverse, Bayfield is situated between the Red Cliff and Bad River Reservations belonging to the Lake Superior Band of Chippewa Indians. Red Cliff residents attend Bayfield Public School and add to its racial and cultural diversity. Because several close friends and relatives are from Red Cliff, I became interested in Native American culture and studied more about it after entering college. Today, I continue to research and write about issues affecting America's "first citizens"

（P2 へ続く）

＊この記事のホームページバージョンには、日本語訳がつく予定です。

ミニコラム　外国語に想う【37】

「英語で犬と猫に話しかける」

国際学部教授
湯浅　正恵

語学は苦手である。高校のとき英語の成績が悪く、受験のために塾に通った。それでも成績が目覚ましく良くなることはなく、志望校には入学したものの大学の英語の授業もダメだった。その私がイギリスに留学し、事の成り行きで博士論文を英語で書くことになった。なんとか書いたものの、今もって英語への苦手意識は消えていない。

それでも私は英語で話すことが好きである。限られた単語で、ひどい発音と文法的間違いを恥じ入りながらも、英語で話すことが好きなのだ。なぜだろうと考えていて、ある時気づいた。日本語の「自分」とは異なる英語の「自分」がとても好きなのだ。そういえば昔、日本人の友達から「英語で話すと全く別人」と言われたことがある。私が日本語で表現することをためらい私の中に閉じ込めていた「自分」が、限られた語彙の稚拙な英語で、私の外に自由に飛び出していく。私の十分に社会化されていない英語は、社会化された日本語の「自分」を剥ぎ取り、別の「自分」を掴み出す。その「自分」が体裁や常識を超えて社会で動き出す。それはとてもステキな経験だった。

最近、英語の「自分」と日本語の「自分」がいイイ感じに交じり合ってきた気がする。そういえば近頃、犬や猫に英語ではなく、日本語で話しかけている。

（P1 から続く）

as well as about the literature and art they produce.

My concern for the environment was also formed in childhood while living on the shores of Lake Superior next to the Apostle Islands National Lakeshore. While camping and fishing with my family, I learned to love nature and to protect our natural resources. These experiences certainly inspired me to become a member of ASLE (the Association for the Study of Literature and the Environment).

Even my curiosity about foreign countries can also be traced back to living in Bayfield. Lake Superior makes up part of the border between the United States and Canada, and, on a clear day, the Ontario highlands are visible from the Bayfield Peninsula. People living in the Lake Superior region, therefore, must cooperate internationally to protect this natural wonder. In fact, signs of the friendship between Canada and the United States are visible all over. Many businesses and homes around my hometown fly both American and Canadian flags. Of course, my first trips abroad, were also to Canada. With Queen Elizabeth II stamped on its coins and road signs using the metric system, Canada seemed an exotic land to me during my childhood, and I suppose these early trips into Canada whetted my desire to travel to other countries starting with my first trip to Japan in the winter of 1991/92.

◆先生の故郷の Bayfield はここ！

◆ Lake Superior で友達とセイリング中の先生（後ろ）

What I Hope My Students Will Learn

As a teacher of American literature and culture at Hiroshima City University, I focus on ideas—multiculturalism, environmentalism, and globality—that were planted as a child living in a small town next to a big lake. It took me a long time to recognize that my hometown may actually be the source of my academic interests and the reason I choose to live abroad. It still amazes me. Aside from what my students at Hiroshima City University learn in my classes, I hope they will keep their eyes open for inspiration, whatever obstacles they face. Insight and passion wait for us in the most unlikely of experiences, including in the places we once considered mundane.

イタリア美術巡礼（４）

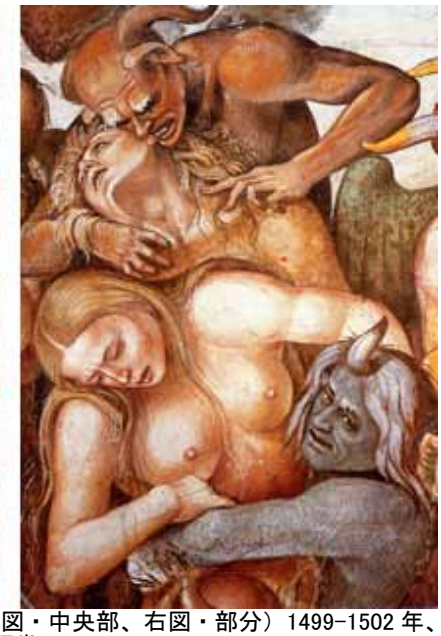
シニョレルリの地獄責め

右側の部分図、手前のペア男女から始めよう。

ほんとうに卑劣な凶漢。悪党。ほとほと救いようのない最悪の、獣の所業。若い女性を拘束していたぶる暴力男は人間じゃない。悪魔だ。証拠は前頭部に盛り上った１本の角。この魔性の男、じつは作者の自画像だというからたまげる。いや、そもそも公共の大聖堂の大壁画の中央にこんな図があって、しかもそれを称える底深い文化性・芸術性に対してこそ賛嘆すべきか。

あそこを見よと指示して、携帯望遠鏡を貸してあげた同行の画学生が、「スゴ！」と絶句して、そして言うことがいい、「先生、ここ教会ですよ、こんなのがあっていいんですか」と僕を譴責する勢い。キミねえ、文化風土を理解し総合的なコンテキストで解釈しなさいと応じておきたい。美術研修は容易でない。

＊



ルカ・シニョレルリ《罰されし者たち》（左図・中央部、右図・部分）1499-1502 年、オルヴィエート大聖堂サン・ブリツィオ礼拝堂

オルヴィエートはローマとフィレンツェを結ぶ幹線上の中世都市。地形的には平野に突出した高台にある。歴史的には要塞都市として教皇直轄地でもあった。

ケーブルカーで岩山を登り入市する。周囲が切り立つ崖の上だから眺望最高（とガイドブック記載）のはずが、あいにくわれらが訪れた日は視界困難なほどの大雪の日だった。

さらに土地の自慢は特産白ワイン。が、あいにくスケジュール上われらは一杯やれなかった。満たされなかった飲食のうらみは今も残りまた次回への希望の火となる。

もうひとつ当地が世界に誇れるのがドゥオモの偉容。天上から降り続く大量の白雪にさえぎられながら、かつ文化財も目も心も洗われて、瞬時見上げればいま建てられたばかりのように新鮮明快、超カラフル。雪の幕の降下とともに大気に露出した巨大な“祭壇画”が上昇する奇跡。ああ、天に召されるファサード、まぶしく輝く強烈な黄金モザイクに埋めつくされて。

その内陣右手のサン・ブリツィオ礼拝堂の著名なダンテ肖像やグロテスク模様の腰壁の上部のルネッタ（半円形壁面）に、裸体表現と終末幻想の“世界劇場”との形容がふさわしい次の７つの大画面がある。《世界の終末（黙示録）》《反キリスト（偽予言者）》、《死者の復活（肉体の復活）》、《罰されし者たち（地獄へ落ちる人々、または地獄）》、《神に選ばれし者たち（福者たち、または天国）》、《天国へのお召し》、《地獄落ち》。

＊

右図の上部は、変則３本（？）角の悪魔に耳を噛み切られようとしている、アゴを出した長髪の罰男。さらに、その上部には（左図参照）、年輩の悪魔（２本角、サボテン状の翼）が両手をとって女性を背負い空を飛ぶ。女の不安な視線は抜刀の動作の武装大天使を凝視する。ふり返る、憎めない面つきの年輩悪魔は女を獲物としたのであり、女は決して救出されたのではない。更なる悲惨へと拉致されるのだ。

その左、空中を足を拡げて逆転もんどり返って絶叫する男。この男のポーズは古今東西の美術史上ほとんど未曽有のポーズではないか。

シニョレルリの地獄図に登場の男女は現世で悪業を重ねた罪深き者らであり、それゆえ懲罰をくらうのである。悪魔の暴力にさらされて、七転八倒、地獄の責め苦に悶絶する。この群像フレスコの激しい力動的肉体表現と劇的主観性は、あのミケランジェロのシスティナ礼拝堂作品、とりわけ最後の審判へと深められていくのである。

ルカ・シニョレルリ（1445-1523）はピエロ・デッラ・フランチェスカの弟子。1519 年、8 才の少年ヴァザーリは老シニョレルリと出会う。「美術家列伝」には親愛をこめ「作法をよく心得た、躾の良い人」で誠実にこやかだった、また「デッサンや特にヌードという基礎作業と創意工夫の優雅さと、物語の結構とによって」（平川訳）後進に道を開いたと記述している。

入門の文献としては、高階秀爾『ルネッサンスの光と闇』中公文庫 1987、の第二、三章、画集を兼ねて東京書籍版『イタリア・ルネサンスの巨匠たち 19』1995、をすすめる。

最後に一言。この「世界の終末」連作、わけても地獄図の余響として愉快感、おどけた諧謔心があるように思う。それはイタリア地方都市がはぐくむ民衆的な精神というものか。

（Sono OOI）

H 23 年度　800 人を超える語学センター視察

今年度は、4 月に語学センターがリニューアルし、ホールには大画面が設置、LL ４０８教室は従来の机がなくなり可動式の椅子が導入され、自習室は各ブースが個人部屋のようになり、語学センターにとっては施設がさらに充実した年となりました。また、今年度新たな試みである、ミニ・オープンキャンパスも 10 月 29 日（土）に行われ、施設としては語学センターが唯一見学対象となり、約 30 名の高校生に自習室にて「コンピューターを利用した英語学習」を体験していただきました。さらに、教務学生室の入試グループ依頼による高校生や PTA による視察も 16 件に及び、今年度は例年以上に多くの生徒に施設見学をしていただくことができました。そうした視察などをいつもアレンジしてくださっている、入試グループの佐々木さんに、語学センターの入試広報の役割について記事を寄せていただきました。

「語学センターと入試広報」

教務学生室　入試グループ
佐々木　宏明

408 教室視察風景：高陽高校

「大学はとにかく広くて、まるで違う世界のようでした。特に私が心を惹かれたのは、CALL 英語集中です」。これは、キャンパス見学で本学を訪れ、語学センターを見学した高校生からいただいた感想です。

キャンパス見学というのは、高校生や PTA が学校単位で本学を訪問し見学するというもので、教務学生室の入試グループが担当しています。今年度は 20 校以上の見学を引き受け、大学の紹介を行いました。プレゼンテーションソフトを利用して 3 学部の紹介や入試の説明をするのが定番の内容ですが、語学センターの協力を得て、語学センターの見学、CALL 英語集中の体験を行うプログラムを用意したりもします。このプログラムについては、ニューズレターで「視察」として、見学校と人数が報告されています。

この視察の CALL 体験には、冒頭で紹介した感想のほかにも、「ゲーム感覚で楽しめた」「続けてやってみたい」といった高校生の感想が多く寄せられています。生徒だけでなく高校の先生方にも非常に好評で、「普段は勉強しない生徒たちがこんなに熱心に勉強に取り組んでいるから、このまま勉強させてよいでしょうか」と時間延長をお願いされることもありました。PTA のキャンパス見学の際にも CALL 体験を行うことがあります。最初は戸惑いがちな方も、問題が進むにつれて真剣に取り組まれるようになる様子が、よく見られました。

また、CALL 体験だけではなく、外国テレビ放送の視聴、完全ワイヤレスで可動式の教室や新しい自習室、ホールにある大画面ディスプレイによる映画上映や水槽のように見える壁面ディスプレイの PC 等を通して、語学センターは多くの見学者を魅了しています。自習室で勉強をしている最中に高校生の行列が見学に入り、迷惑に感じた学生の方もいらっしゃるかもしれませんが、学生が自習している様子を目の当たりにして、「自分もこの大学でこんな風に学びたい」という憧れを感じた高校生も少なくないようです。

ここまでキャンパス見学の話をしてきましたが、今年度３回実施したオープンキャンパスでも語学センターにご協力をいただきました。学内ツアーの見学コース、CALL 講義デモや自由見学での CALL 体験と、多様な形式で高校生に魅力を伝えていただきました。このように語学センターは、入試広報という分野においても、大きな役割を果たしています。

入試広報の活動は上半期に集中しており、今年度は 10 月までに 800 名以上を語学センターに案内しています。一人でも多くの生徒に、広島市立大学を目指すきっかけを与えることができればと、語学センターの堀本さん、伊達さんと話をしています。

視察・オープンキャンパス等報告

10 月 5 日（水）　祇園北高等学校ＰＴＡ　(43 名)
10 月 17 日（月）　鈴峯女子高等学校　(48 名)
10 月 18 日（火）　安芸府中高等学校ＰＴＡ（28 名）
10 月 20 日（木）　吉田高等学校ＰＴＡ　（10 名）
10 月 21 日（金）　千代田高等学校　（25 名）
10 月 29 日（土）　ミニ･オープンキャンパス（29 名）

発行日　2012 年 1 月 12 日
発行　広島市立大学語学センター
〒 731-3194
広島市安佐南区大塚東 3-4-1
編集　堀本真由美
伊達美和子（内線：6410）
Phone　(082)830-1509
Fax　(082)830-1794
E-mail　lang@intl.hiroshima-cu.ac.jp
ホームページ
http://call.lang.hiroshima-cu.ac.jp/lang/index.html

 ＊知トラ　映画上映会開催！　1 月 16 日（月）～ 1 月 20 日（金）　詳細は語学センター掲示板にてご確認ください！